

【第四二回大会講演】

語り物文芸の異類合戦物について

— 「餅酒合戦」を例として —

伊藤 慎吾

はじめに

日本の物語文学史の中で中世後期から近世前期にかけて数多く作られた短編の物語草子群のことをお伽草子と呼ぶ。この時期の物語文学の大きな特色の一つに、人間以外の者たち、すなわち異類と総称される獣や鳥、魚、虫、植物、さらには器物などが世界の中心にあつて、恋愛をしたり、合戦をしたりする物語が大いに発達したということが挙げられる。これら異類の物語を異類物と呼ぶが、その中でも合戦をテーマにしたものを異類合戦物と分類する。

魚介類と野菜が戦つたり（『精進魚類物語』）、淡水魚と海水魚が戦つたり（『魚太平記』）するのは、一見、荒唐無稽に思われる。しかし、異類の名前を人名に置き換えてみれば、大筋で、別段おかしい印象は受けない。二つの対立する勢力が武力衝突をしてどちらかが勝つ、あるいは、仲裁者が現れて和睦すると

いうストーリー展開は、人間社会の物語としてもありふれたものだからである。つまり、人間社会の出来事を異類の社会に置き換えただけなので、物語の形式としては無理なく受け入れられるだろう。

では人間社会のことを異類社会に置き換えて、何の意味があるのかといえば、一番はパロディとして楽しむことであつたと思われる。登場キャラクターを人間から異類に置き換えることで、個体名、キャラ付け、言動に可笑しみが生まれる。その他愛ない可笑しみは、はやく明治時代に、児童向け雑誌を主宰していた石井研堂が「未だかつて血を流し、肉を飛ばすに到らず、たゞ、あゝ面白いと云ふ勝鬨かちどぎの声をあげしめんことを期するのみ」と述べているように¹⁾、児童の受け入れやすいものであつたし、また大人であつても十分に楽しめるものであつたろう。また教養の足りない子どもにとつて、難解な語彙や言語遊戯、故事逸話の見られる物語は、時に物語世界の出来事よりも文章表現に興味に向かうことも多かつたに違いない。それを見越して

学習の材料になることもあった。⁽²⁾

1 異類合戦物としての特色

こうした異類合戦物を読む上で重要な古典作品が『平家物語』である。言い換えれば、『平家物語』はこれら異類合戦物に多大な影響を与えたわけだ。このことは異類合戦物全般の特色とも関わってくる。以下にaからfまで六点、その特色を示してみよう。本稿末尾に、山鹿良之が昭和三〇年代に語った「餅合戦（餅酒合戦）」の録音資料を文字起こしして掲載する。これを手掛かりにしながら見ていきたい。

a 軍記物に倣った文体

まず文体である。本稿末尾に掲げた2の段に次のような一節がある。

竈の上には大きな釜を乗せ、下から火を焚いて、湯気がぱあつと立つ、その中に、酒の浪人が飛び込んで、大音声。^{だいおんじやう}
「やんや、我こそ、ここに参りし、おお、いかなる者と思ひしか。年の初めに、いつごろ、我こそ、水盃と無うてならない初銘酒。祝いの時にも、こと問題起きても、我なくては収まらん。なんと己が自慢高慢いたしても、餅の野郎ども、酒に勝つべきものならば、来たれ来たれ」と大音声に呼ばわたり。

ここに直接関わるものではないが、『平家物語』の「水島合戦」

の章段に次のような部分がある。

押しよせてみければ、妹尾太郎、矢倉に立出でて、大音声をあげて、「去ぬる五月より今まで、甲斐なき命を助られまいらせて候をのをの御芳志には、是をこそ用意仕りて候へ」とて、究竟のつよ弓勢兵数百人すぐりあつめ、矢前をそろへてさしつめひきつめさんざんにある。

もとより参考までに掲げたに過ぎないが、このように類似する表現が見られる。とはいえ、中世近世の読み物としての異類合戦物と『平家物語』の親近性に比べたら、口承文芸としての異類合戦物はそれに及ばない。それよりはむしろ、例えば「天竜山」など（くずれ）として語られていた合戦物に近いものといえる。

b 人名に擬したキャラクター名

人名に擬したキャラクター名とは、いわゆる擬人名である。餅をキャラクター化して、餅の十郎としたり、酒の三郎としたりするものがこれに当たる。本稿末尾の「餅酒合戦」では、固有名詞は餅の十郎ただ一人しか登場しない。昭和三八年の録音でも、餅の十郎之介の名が挙がるのみである。それで何が特色かということだが、たとえば筑前琵琶の森田勝浄の台本（『筑前の荒神琵琶 付録』所収）では餅の六郎・酒の三郎・小麦団子五郎十郎・尾張赤大納言味噌漬卿（尾張大納言）の四名が登場する。それでも少ない。これに対して、近世期の『餅酒大合戦』などの読み物では一〇名以上の名が挙がる。多

い少ないの差はあるが、登場キャラクターに擬人名が使われることが特色の一つであるといえることができる。

C 軍記作品に基づくエピソード

次に軍記作品に基づくエピソードである。たとえば『虫合戦物語』（国立国会図書館所蔵写本）に次のような挿話がある。

かゝる所に夜もふけ、うしみつの刻限に築山の林頭より、黒雲の巢を引わたし、御殿の上に飛かゝる、米虫きつと見上れば、大入道の形あり、弓矢取て打つかへ、南無や熊野の御神と、心中に祈念して、よつひきひやうとはなつ矢に、得たるやおふと矢さけひして、落る所をこぬか虫、身よりこぬかを取り出し、入道か目の中へ、九袋を入たりけん、螢なのおほしめし、永(垂力)なくももすそより、火をともし御覧あれは、頭わへの字目はまの字、はなと口とは虫の二字なり、これそへマムシ入道也、

これは『平家物語』に収録される源頼政の鶴退治説話に拠っている。『平家物語』などの軍記物語の説話や場面を踏まえて叙述することが少なくない。

しかし、この特色も語り物では稀薄だ。本稿末尾の「餅酒合戦」では、5「粽の団子登場」の段中の傍線cに見られる酒呑童子退治譚がこれに該当する。もともと、この説話の原拠は不明である。

d 両陣の勢揃いの描写

次に両陣勢揃えの描写が挙げられる。勢揃えは合戦に加わっ

た将兵の名を列挙することを基本とする。たとえば『太平記虫合戦』（『近世咄本集』所収）には、次のような勢揃えの描写が見られる。

まつ一ばんにおくりおふかみの助口ひろ、たはた荒四郎いのし、ふたのろ右工門のうなし、かのこまだらの助さほ鹿、手なが山のゑんこうほうしりあか、王子の山のあなもりびやつこの助つうりき、同じくばけ太郎のきつねは、打物わさはふへてなり、てきの虫めら一々に、ばかしてせうりをゑてもの、まつげをよまんとす、みけり。

人間世界の合戦では、人名を列挙するばかりなので、文芸としての価値は皆無と言つてよい。その代わり、歴史記録としての価値が問われるところである。しかし、異類合戦物では、もちろん架空の物語世界であるから、列挙される名前に史料性はない。ではどんな意味があるのかと言えば、言葉遊びを楽しむ場面としての意味をもつのである。右の『太平記虫合戦』を例にすれば、狼だけに名前が「口広くちひろ」、猪だけに「田畑荒四郎」といったものだ。また、穴森白狐の助通力の住まいがなぜ王子の山なのか。これなどは読者に対する謎掛けでもある。読者は次々にそうしたネーミングに見られる言葉遊びを読み解くことでじっくり楽しんで読むことができるのである。

ところが本稿末尾の「餅酒合戦」では、そうした場面が一切ない。読み物の異類合戦物の類型に照らしてみれば、2の章段中にあるべき勢揃えの場面であるが、見ての通り、そうはなっ

ていない。4 「保命酒登場」の章段には「あにや、ものども、よくも聞け。ただいまこれに参りしそれがしは、備後で名高い保命酒とは身が事なり。肥後で名高い山鹿銘酒の灰持か。玉名で名高い悪餅。味醂酒、やあや、続いて来るはサツポロビール。キリンビールにアサヒビール。来たれ来たれ」という酒尽くしの場面があり、それが辛うじて勢揃えの様相を呈しているといえるだろう。

e 合戦時の出で立ちの描写

次に五つ目の特色として、合戦時の出で立ちの描写が挙げられる。『平家物語』をはじめとする軍記物語では個人戦を行う将兵は、その名とともに装束や武具等を描くことが常套だ。異類合戦物ではそのキャラクターの特色、いかなればキャラ付けに活かされる。『餅酒大合戦』では次のような描写が見える。

扱三番にのり出だす大将粽柏之助もちひろ、其の日の出で
たちは、張り子の兜に緋緘の鎧を着し、菖蒲刀をよこたへ、
五月雨と名づけたる荒駒に打ちのり、子もちすじの大幟を
まつ先におし立つる。

右には餅方の大将粽柏之助もちひろ（餅広）の出で立ちが描写されている。張子の兜・菖蒲の刀・五月雨という名の荒駒など、いずれも端午の節句に縁のある素材や名称が使われている。このように、そのキャラクターならではの設定を読み取る面白さが出で立ちの描写には認められる。

本稿末尾の「餅酒合戦」でも、5 「粽の団子登場」の段に傍

線eを引いた「さて、薦の鎧を着し、いがらの帯を引きしめ、ギリギリギリりと締め込んで、さて二百八寸、ちくぞの中で鍛え上げたる菖蒲勝負剣を腰に差し」と見えるが、あまり工夫は認められない。

f 対戦者もしくは敵陣に向けての名乗り

六つ目の特色として、対戦者もしくは敵陣に向けての名乗りが挙げられる。名乗りは多くの場合、一騎打ちを行う前や敵を挑発する際に発せられるもので、自分の名前のほか、家系や居住地などを告げることも少なくない。やはり軍記物語にしばしば見られるのだが、これを異類合戦物でも頻りに取り入れられている。読み物の事例として『諸虫合戦記』（『文芸論叢（大谷大学）五三、所収）を例示してみよう。

声静マレバ足長ハ駒シヅ／＼ト乗出シ大音上テ名乗ル様、
只今寄タル大将ヲ如何ナル者ト思フラン、事モヲロカヤ仁
王六十代延喜第四ノ王子、蟬丸ノ末葉ニテ蟬ノ六郎音高也、
カク申ス某ハ天津兒根ノ苗裔、大書冠鎌足大臣八世ノ孫蟬
螂ノ大臣足長トハ我事ナリ、汝等日外音高ノ子息音続ヲト
リコトシ、並ニ我子ヲ害セラレ此確執ヲ晴サン為メ音高足
長両大將是迄馬ヲ進ムル也、後悔ナラバ音続ヲ早速帰シ甲
ヲ脱ギ降参イタセユルス可シ、若シ又左ナキ者ナラバ蜘蛛ノ
奴原一々ニ根ヲタツテ葉ヲカラサン、ナガラヘ他ノ手ニカ、
ランヨリ尋常ニ服ヲ切レ服ヲ切レトゾ置リケル、

右の部分では、大将蟬の六郎音高と蟬螂の大臣足長両人の名

乗りが記されている。蟬のほうは醍醐天皇第四皇子蟬丸の子孫であること、蟻螂のほうは藤原鎌足の八代の後胤であることが告げられ、その上で敵方を挑発している。音高を蟬丸の子孫としたのは「蟬」であるからで、足長を鎌足の子孫としたのは「鎌」からの連想と解される。

本稿末尾の「餅酒合戦」では行頭に〈f〉で示したものがこれに該当する。すなわち2「発端」の段の餅の某と酒の浪人某、4「保命酒登場」の段の酒の某、5「粽の団子登場」の段の餅某、6「味噌漬け大根の仲裁」の段の味噌漬け大根の名乗りである。短い物語でありながら、随所に名乗りの場面があることが知られるだろう。これはこれで、読み物と比べてみると特徴的なものである。この語り物は名乗りの応酬で成り立っているとさえ思われる構成をとっているのである。

以上のように、作品によって強弱の差はあるものの、多かれ少なかれ、異類合戦物には以上に示したaからfの六つの特色が見られる。

2 異類合戦物の歴史

では、こうした物語は歴史的にはどのように展開していったのだろうか。主要な作品を次に掲げてみよう。

中世後期

〈お伽草子〉

近世前期

『鴉鷲合戦物語』や『精進魚類物語』『隠れ里』など

〈仮名草子〉

『猷太平記』『草木太平記』『魚太平記』『諸虫太平記』など

〈子ども絵本〉

『軍舞』(「むしまひ」「とりけだ物まひ」「いも上るり」「し

やうじんもの」)

近世中後期

〈黄表紙〉

『腹京師食物合戦』『菓物見立御世話』『餅酒腹中能同志』

『金銀太平記』『衣食住世帯評判記』『忠臣瀬戸物蔵』『茶漬

原御膳合戦』『竈將軍勘略卷』『食類合戦和陸香之物』『三葉

太平記』など

〈滑稽本・断本・これらに類する写本作品〉

『魚貝英記餅酒合戦』『諸虫合戦記』『滑稽五穀太平記』『麻

疹太平記』『魚類青物合戦状』『さかなあをもの大合戦』『体

合戦』『世帯平記諫略卷』『餅酒大合戦』『太平記餅酒合戦』

『餅酒後日太平記』『餅酒論笑太平記』『名物名代 餅酒騒動

はなし』『道具太平記』『好色後日軍談』『大寄席 嘶の尻馬』

シリーズのうち、『世帯平記雑具咄』『太平記呉服合戦』『太

平記虫合戦』『虫合戦猷鳥の助太刀』『男女太平記』『好色

開ヶ原合戦』『飯太平記大合戦』『洗濯大合戦』など

〈錦絵〉

「青物魚軍勢大合戦之図」「餅酒大合戦之図」「太平喜餅酒多々買」「餅酒二偏嘉世意の多々買」「道戯大合戦」「夏の夜虫合戦」「芋だこ合戦のづ」「龍宮魚勝戦」「山畑道化合戦之図」「売買大合戦」など

〈一枚摺〉

「流行はしか合戦」「葉の病退治の図（仮題）」など

〈語り物・語り節〉

「餅合戦」「芋浄瑠璃」「虫尽し」など

中世後期、人間以外のものたち、すなわち異類の世界を物語草子とする文学史の流れが進展していった。冒頭に述べた異類物である。その異類物では恋愛や合戦をテーマとすることが好まれた。合戦をテーマとする場合、先行する『平家物語』が規範となったと考えられる。人間同士の合戦物語が異類の合戦物語に横滑りされることで、パロディとして楽しむ対象となつていった。『平家物語』は読み物として、また語り物として、さらに物語中の種々のエピソードが個々に派生して受容されることで、集合知として受け入れる素地ができていた。それゆえに『平家物語』を、歌舞伎でいうところの〈世界〉として、パロディを作つて楽しめたわけである。もっとも、タイトルには「太平記」を用いることが多い。中世最大の軍記物語である『太平記』は、総体としては庶民文化に浸透せず、部分的なエピソードが広まる程度であつた。それでありながら、書名に多用されたことは、合戦を経て天下泰平に至るコンセプトがパロディを本質

とする異類合戦物に通じるものがあつたからだろう。

これら異類合戦物は多種多様なキャラクターが登場するものであるが、しかし、物語の展開は類型的である。対立軸もまた同様で、餅対酒、魚対野菜、葉対病、虫同士が比較的多い。

餅と酒との対立は、左に示すように、仮名草子をはじめ、多くの物語草子や物語性のある戯画で好まれた。そればかりでなく、民俗芸能にもなつた。

仮名草子

『酒餅論』

黒本

『酒餅和合無間鐘』

黄表紙

『餅酒腹中能同志』

滑稽本・断本・これらに類する写本作品

『餅酒軍記』『魚貝英記餅酒合戦』『太平記餅酒大合戦』『餅酒大合戦』『滑稽五穀太平記』『餅酒後日太平記』『餅酒論笑』

太平記『名物名代 餅酒騒動はなし』

錦絵

『餅酒大合戦之図』『太平喜餅酒多々買』『餅酒二偏嘉世意の多々買』

小猪岡神楽狂言台本

『餅合戦の事』

また器物同士の対立する物語は『世帯平記雑具噺』などの草

（せたいへいきがらくたばなし）

また器物同士の対立する物語は『世帯平記雑具噺』などの草

双紙として類似作品が多く作られた。『世帯平記諫略卷』『衣食住世帯評判記』『世帯平記雑具咄』『道具太平記』などがそれで、またそこから写本としても広まり、改作も行われた。そればかりでなく、奥浄瑠璃や九州の盲僧琵琶のチャリ物(滑稽物)になつて、語り物としても受容された。愛媛の黒瀧神社では「道具太平記がらくた合戦」(『愛媛県史』民俗編、所収)として、高注繩あげ神事における早口口上として取り入れられた。石井研堂の編纂した『万物滑稽合戦記』収録の『世帯平記諫略卷』の末尾には、石井によつて「此雑具話は、嘉永のころに、講釈師が寄席にて口演せしともありといふ」と記されている。明治の人間による幕末期の寄席と異類合戦物の関係を示唆する発言であり、信憑性は高いと考へる。⁽⁴⁾

このように、歴史的に見てみると、もともと中世後期に読み物として出発し、近世、特に一八世紀以降、物語草子・語り物・歌謡・話芸・絵画など、様々なメディアを通して異類合戦物というテーマをもつ物語が継承され、また生み出されていったことが分かる。これと並行して、滑稽な語り物、語り節として、具体的には一七世紀に「芋浄瑠璃」(『近世上方子ども絵本集』所収)と呼ばれるものが現れ、一九世紀前半には「さかな浄瑠璃」と呼ばれる語り物が義太夫節や筑後節で行われたようである。完全には伝わらないものの、西沢一風の『音曲色果籠』に見える「魚の神おろし」「鳥の勢ぞろへ」がその一部として記載されている。それらには合戦場面は語られていないが、龍宮城

を本拠地とする魚と、鳥の内裏を本拠地とする鳥の軍勢同士の間合戦物であつたことが推測されるものである。

これらの文芸は、幕末明治期を経て、文芸・絵画の分野では、多く衰退してしまふが、しかし、在地の語り物文芸の中に生きながらえて行くことになつた。特に、九州地方の盲僧琵琶におけるチャリ物の題材となつたことで、座興としての語り物としての位置を確固たるものにした。さすがに盲僧琵琶自体の社会的需要が失われていく中で、第二次大戦後は語る機会も減つてきた。しかし、先に示した山鹿良之の語りに見られる、「やあや、続いて来るはサッポロビール。キリンビールにアサヒビール。来たれ来たれ」といったフレーズから窺われるように、その時と場所に応じたアレンジのできる柔軟性を持ち合わせていたことは、大衆芸能として評価すべき点だろう。⁽⁵⁾

3 語り物としての異類合戦物の位置

(1) 祝儀とチャリ

さて、異類合戦物は、語り物としてどういった位置にあつたのだろうか。盲人の芸として、滑稽物全般についてみると、左に示したように、古くは室町時代、奈良の興福寺に参賀し、そして早物語を語つたという記録がある。

『経覚私要鈔』文明三年(一四七二)正月一四日の条(史料纂集) 巳下刻盲目参賀、十五人(中略) 稻花申之。器用者在之。

平家一句可語由仰之間、一句語之。其後給暇了。有能者可申之由仰之間、早物語申之。一興。

平家琵琶を一句語ったあと、早物語を語ったことが分かる。すなわち平家であれ、くずれであれ、本来の語り物の延長で、余技的に行われた滑稽な語り物は、一方で祝儀性も内包しており、正月の祝芸としての側面も持っていた。正月一四日に語るということには、そのような意味もあつたのだろう。この性格は近代に至るまで受け継がれていた。『西頸城年中行事』（西頸城郡郷土研究会、昭和二十六年）には次のような記述が見える。

オネントウ 糸魚川の一部では、年玉の事を、オ年頭とも解してゐるらしい。子供は正月二日に書初の年頭を、親類に贈ると言ふし、ゴボサと土地の言葉でよぶ盲人は、やはり二日にテンポウを語つて年頭にしたと言ふ。

新潟県糸魚川市の一部では、ゴボサと呼ばれる盲人が正月二日に訪れて、テンポウを語つたという。テンポウとは早物語のことである。⁶⁾

「餅酒合戦」は正月に語らなくてはいけないというものではない。しかし、この合戦の日時は、「頃もいつぞや元日の朝」とあるように、正月元旦である。元日の朝に繰り広げられる餅と酒との物語なのだ。当然、正月料理としての餅と酒の意味が重なる。

そればかりでなく、この物語は餅と酒が今にも武力衝突しそうな状況で言い争いしている。それを味噌漬け大根の仲裁によって和平がもたらされるのだ。これは〈争つて、収まる〉という、

つまり戦乱を経て太平の世が到来するという経緯を再現したものととなっている。この点から、この物語が構造的に祝儀物としての側面を持つていることを表していることが読み取れるだろう。

こうしたハレの側面のほか、日常においては本格的な語り物芸の披露や仏事の後の座興として語られるものであつた。むしろ、これが通常であり、この点に存在意義があつたとみることができよう。

芸能としては、このほか、近代を待たず、音曲としては衰えた。阿呆陀羅經のレパートリーにもなりながら、その衰退と運命を共にしたわけだが、それでも盲僧琵琶の中で命脈を保った。その最大の要因は、本業の後や合間の余技にあつたと思われる。

また、語り物の異類合戦物は、語りが固定せず、その場その場の状況で、自由に改変できるものだった。先に掲げた酒尽くしのくだりで、サッポロビールやキンビール、アサヒビールを取り入れていたが、こうした点に、時代状況に対応しようという意図を汲み取ることができよう。

(2) 語りの流動性

さて、山鹿良之による昭和三〇年代、昭和三十六年七月三二日、昭和六〇年代の演奏について、簡単に触れておきたい。

まず導入の部分（1「前向上」）（2「発端」）は三種ともまったく異なる。

〈昭和三〇年代〉

みなさまがた、あろうことか、なることかは存じませぬが、
 さてもお笑いといたしまして、餅と酒との自慢、いよいよ
 餅と酒の戦になろうとしております。

さて、餅の類はいちいち着到に付け記す。さて、我も
 俺もと集むる集まる餅の種類、幾種類ばかりか、まだまだ
 数知れず。……大いに腹を立て、

「何ちよこさいな餅やつども、なんで我々になかうものか」
 と、日本酒の一同が集まりて、

「酒の味方はこれにあたれ集まれ」
 と大音声。

〈昭和三六年〉

(前向上なし)

そもそも餅に、酒と餅の口舌ができて、酒は大いにこの世
 で我が身より高いものはないと威張り、一方の酒もそのご
 とく、酒と餅の口舌はいつかないかな、あい分からず、あ
 る日のこと。都のごうごうと明け渡れば、珍しく、正月元
 旦もまた、餅の十郎イチイチ集まって勢ぞろい、鉄九槽
 に作ったやがあり、天も響く大音声。

〈昭和六〇年代(動画)〉

(前向上なし)

小豆元年黄粉の年、味な年号が始まって、その年号もさて
 年の始めに、祝い酒や祝い餅と長らく使われたる酒餅、あ
 る暮れの年、思わぬささいなことが問題となり、これがも

ととして、酒と餅の争い、さてそのとき、仲裁する人ぞ
 さらになし。次第に議論も厳しくなつて、わがまま、我ら
 の自慢がもととなり、餅と酒との戦が始まる。

右に冒頭部分だけ挙げたが、それだけでも三種ともかなりの
 異同が認められるだろう。前向上の有無は演奏する場の状況に
 大きく依存するものだろう。中でも昭和六〇年代の演奏には、
 戯年号「小豆黄粉の年」を使っている。筑前の森田勝浄の台本
 にも「菓子盆元年小豆黄粉の年」とあり、古い語りに回帰した
 ような印象を受ける。

昭和六〇年代の演奏は省略的なものなので、昭和三〇年代、
 同三六年の演奏を比べてみると、表に示したように、全体の構
 成がかなり違っていることに気付く。

図 「餅酒合戦」構成対照表

昭和三〇年代の演奏		昭和三六年七月三十一日の演奏	
1 前向上		1 ナシ	
2 両陣勢揃え		2 両陣勢揃え	
3 餅十郎登場		3 餅十郎之介登場	
4 保命酒登場		4 保命酒登場	
5 粽の団子登場		5 餅酒大口論、粽の団子(名前ナシ)登場	
6 味噌漬け大根の仲裁		6 味噌漬け大根の仲裁 (漬物の効能説明ナシ)	

この表からは、大きな物語の展開(1-6)に違はないものの、その段ごとのモチーフが別の段で用いられていることが分かる。

また、昭和三〇年代の語りでは餅の十郎が3に至って登場するようなかたちを採っている。では2に見える「酒の浪人」とは誰か。昭和三六年の語りを聴くと、餅の十郎之介の台詞であることが知られる。実際は、餅の十郎は2の段階で出番があったのである。この他にも、一方にあって他方ない、また他方にあつて一方にないモチーフが散見される。

このように、「餅酒合戦」は、同一の演者であつても、大きく変化していることが分かる。それは長年の経験を経て変わつていったという性質のものではなく、むしろ、状況に応じた変化である。それゆえに、数十年経つてキャラクター名や年号名が表面に出て来ることがあるのだろう。一人の演者の語りを固定したテキストとして捉えることの危険性を認識する必要があるだろう。もちろん森田勝浄の台本や他の演者についても言えることである。

まとめにかえて

最後に、読み物に対する語り物としての異類合戦物の特色についてまとめておきたい。

滑稽物には文字テキストから語り物になつたものが散見され

る。しかしながら盲僧琵琶のチャリ物である「餅酒合戦」はその例とは考えがたく、長らく口頭伝承が行われてきたものとみえる。

本稿第一節で見てきたように、読み物に比べ、固有名詞が著しく少ないということが挙げられる。「餅酒合戦」と直接の繋がりはないものの、江戸後期の『餅酒大合戦』には、安倍川左衛門もちうじ(餅氏)・大仏右馬頭米吉・粽柏之助もちひろ・弥生三郎菱餅・松餅の貫之・かき(掻き)餅藏人・水餅五郎・雑煮ぞう兵衛など、擬人名の付いた餅が一〇名余り出て来る。一方の酒方も同様に、池田神福寺諸白・劍菱伊丹之助・万願寺入道・焼酎・白笹小西之助・老松山本の判官・白雪かせや哥之助など、一〇名余り出て来る。読み物の異類合戦の多くは、このように、擬人名が好んで用いられるのである。なお、劍菱伊丹之助の例のように、具体的な酒の銘柄や店の名を挙げることも多く行われた。

これに対して筑前琵琶の森田勝浄の台本では、餅の六郎・小麦団子五郎十郎・酒の三郎・尾張赤大納言味噌漬漬卿の四名のみ、山鹿良之の語りに至つては餅の十郎(十郎之介)だけで、尾張赤大納言はただの味噌漬漬大根という普通名詞の扱いであった。

このように語り物では個体名を減らし、その代わり、餅や酒の普通名詞、つまり保命酒や味噌酒・サッポロビールなど、耳で聴いて分かる名で表す傾向が強いと言えるだろう。これは擬人名が、先述したように謎掛けなどの言葉遊び要素を楽しんで

読み解く趣向があり、文字を眼前に思案する性質のものだからだろうと思われる。

また、構成がかなり自由に變化するのも語り物の特徴であろう。これは読み物が書写の過程で増補されたり、省略されたりというものと、性格が違う。語りの順序を自由に入れ替えたり、加えたり、減らしたりしているのである。

また、構成が単純化する傾向もあるように思われる。山鹿の「餅酒合戦」は名乗りの応酬のようになっている。これによって、勢揃えや出で立ちの描写が甚だ簡略なものとなっている。また、口論の発端は三つの演奏記録を比べるに、三者三様の語りであった。

さて、異類合戦物の特色に軍記物語からの挿話ということも述べた。本稿末尾掲載の「餅酒合戦」では、酒吞童子退治譚は文字テキストからではないようだ。これはあるいは自身の語り物レパートリーの中から取り入れたものの可能性がある。つまり、『平家物語』や『太平記』をタネ本として利用するのではなく、記憶する語り物の、いわばデータベースから呼び起こした説話を巧みに取り入れているのではないかということだ。

以上、語り物芸としての異類合戦物について論じてきた。誰も言及することはないが、異類合戦物は、国際的見地から見て、文芸のジャンルとして極めて特殊なものである。中世後期から近代初頭に至るまで一二〇種余りの作品が確認される。中世後

期に異類物の世界観が開拓された。人間以外のものたちの暮らす世界での出来事が、子どもばかりでなく、大人も当然のように受け入れる、異類に寛容な文化的素地があるだろう。加えて、軍記物語の文体やストーリー、キャラクター設定が融合すること、日本独自のジャンルが形成されることになったということができるだろうと考える。

注

- (1) 石井研堂『万物滑稽合戦記』（博文館、明治三四年）。
- (2) 伊藤慎吾「語彙学習とお伽草子―「魚類青物合戦状」をめぐる―」（『室町戦国期の文芸とその展開』（三弥井書店、平成二〇年）。
- (3) 伊藤慎吾『擬人化と異類合戦の文芸史』（三弥井書店、平成二九年）に詳述。
- (4) 詳しくは伊藤慎吾「歌謡・民間芸能・寄席」『擬人化と異類合戦の文芸史』参照。
- (5) なお、二〇一八年二月九日には、兵藤裕己氏主宰の盲僧琵琶研究会（於成城大学）で後藤幸浩によって「餅酒合戦」の演奏が行われた。管見では、これが現段階における最新の「餅酒合戦」の記録である。
- (6) テンポウについては武田正『天保元年やかんの年―早物語の民俗学』（岩田書院、平成二二年）に詳述されている。
- (7) 畑有紀「酒餅論」をめぐる江戸後期の酒と菓子」（『財団法人

たばこ総合研究センター助成研究報告「平成二六年」参照。

付録資料

「餅酒合戦（餅合戦）」 山鹿良之 昭和三〇年代（兵藤裕己氏所蔵カセットテープ）

1 前向上

みなさまがた、あろうことか、なることかは存じませぬが、さてもお笑いといたしまして、餅と酒との自慢、いよいよ餅と酒の戦になろうとしております。

2 発端（両陣勢揃え）…：d

aさて、餅の類はいちいち着到に付け記す。さて、我も俺もと集むる集まる餅の種類、幾種類ばかりか、まだまだ数知れず。…：大いに腹を立て、

「何ちよこさいな餅やつども、なんで我々になうものか」と、日本酒の一同が集まりて、

「酒の味方はこれにあたれ集まれ」と大音声。

酒の類も勢をそろえ、今や遅しと待つ時は、頃もいつぞや元日の朝。餅のやるやら、次郎やら、たいつと櫓に駆け上がり、ぶうとわたりに膨れ上がり、家にも空にも響き渡る…：の大音声。

f「酒の者ども、耳穴さえてよくも聞け。たたいま、これに現

れしそれがしは、年の初めなる餅なるぞ。この餅、我無くして、年は暮れぬし、明けん。酒の類の者どもが、なんば参りても餅の類に勝つべきものか。年の初めになるならば、年の餅にて、はよみむこいも、初餅かな。さて、次に搗く餅は三月三日が日しの菱餅なり。五月五日、つづく、つづく日こそ数知れぬぞ」と、呼ばれる声に、酒の野郎ども大いに腹を立て、俄かに櫓突き立てたり。竈の上には大きな釜を乗せ、下から火を焚いて、湯気がばあつと立つ、その中に、酒の浪人が飛び込んで、大音声。

f「やんや、我こそ、ここに参りし、おお、いかなる者と思いしか。年の初めに、いつごろ、我こそ、水盃と無うてならぬ**初銘酒**。祝いの時にも、ことを問題起きても、我なくしては取まらん。なんと己が自慢高慢いたしても、餅の野郎ども、酒に勝つべきものならば、来たれ来たれ」と大音声に呼ばわつたり。

3 餅十郎登場

その時に、**餅の十郎**、腹を立て、

「やあや、何をぬかすか、ちよこさいな奴。たたいまも申し聞かせた通り、年の初めの年の餅。…：何事についても、餅がのうてはならん、取まらん。年の初めにも祝いが来ても祝い餅、供養のその時は供養餅。それが何をぬかすか、来たれ来たれ。」

4 保命酒登場

その時に、酒の仲間よりも、薦こむか被りかで立ち上がったる者、いかなるものか、大音声。

f 「あにや、ものども、よくも聞け。ただいまこれに参りしそれがしは、備後で名高い保命酒ほうめいしゅとは身が事なり。肥後で名高い山鹿銘酒やまがの灰持あかもちか。玉名で名高い悪餅。味醂酒あじ、やあや、続いて来るはサツポロビール。キリンビールにアサヒビール。来たれ来たれ」と大音声。

5 粽の団子登場

しごとときぎにここにまた、五月五日によくできるところ、これこそ、いずこのなに餅なるか。c 丹後丹波の国境、大江山に住処を致したる酒呑童子さかづきに、鬼神退治きんしんたいぢにおいてになさるその時は、滝川堤に達したるは、頼光公たのみつみの名物で、鬼の梃子こしもちが現れたり。ついに現れたるそのけもの。e さて、薦こむかの鎧よろいを着し、いがらの帯を引きしめ、ギリギリギリりと締め込んで、さても二百八寸、ちくぞの中で鍛え上げたる菖蒲劍しょうぶけんを腰こしに差し、負うて槽せうに突き立てやがり、

f 「やあ、酒の類の者ども、よくも聞け。我こそ、五月五日の粽の団子。粽ちまきの団子と俺を呼ぶ奴が、餅の衆には愚か、餅のわけ、いちいちよく聞かす。よくも承れ。たしおの餅には、いびょう餅。まだまだ続いてくるべし。かねて持病とは知らねども、

生まれついでての癩癩餅。誰にも一同に勝つべきものならば、これに入れて見参しよ。」

しゅうしゅうぼうと、菖蒲棒の七尺八寸の名刀を、キリキリと木き振り回し、来たれ来たれの大騒動。わいわい、餅と酒との大げんか。

6 味噌漬け大根の仲裁

この由、たれ知るまいと思ひしが、奥の味噌部屋のかたよりも、きつと聞いていたる味噌甕みそがら中に住み込みいるのが、**味噌漬**みそづけ大根だいこん。

「あいや、餅と酒との高慢けんか。このままにしておるならば、大騒動。我が参つて収めん。」

こんにきにも、そうじゃそうじゃと味噌甕みそがらよりも飛んで入れ、味噌の鎧よろいを着しながら、咳も騒さわぎも致さず、のっこりのつこりと現れて、

f 「やあややあや、そこなる餅の類のみなみな、静まれ。酒の類もみな静まれ。ただいまこれに参りし予は、味噌の中に住み込んでいる味噌漬けなり。かの大根だいこんが聞いたうえからは、沈んでなくては、腹の虫が収まらん。喧嘩けんかするには及ばない。待つて静かに致されよ。双方、餅の類にも理屈ある。酒の類にも意味深い義が御座るぞ。餅にも祝いわい餅、扶養餅、さまざま喜ぶ餅の種類は数知れず。また酒にも、お祝い酒や供養酒。めでたい時ばかりの酒でなく、こと問題が起きたるその時、怒るも酒、

怒らんと相なりながら、収まるにも酒なくしては収まらん。それについても、餅や酒どもの、我がのうては敵うまい。一番馳

走のその前に、何事も漬物、おぶくはないか、味噌のコウコあるまいかと。口直しに、参らるるものは、我々同様のものばかり。この味噌漬け大根が仲裁で聞かないものならば、このまま、我を目当てに蹴ってみられよ。相手になる」

と、味噌の鎧を着たるそのまんま、味噌をつけ、大根のやつが踊りだす。この勢いを並んで居たる酒や餅も、ひっそりと静まりて、

「いやいやなるほどなるほど。この味噌漬け大根殿が言われる通り、餅を食うても酒飲んでも、また飯を食うたるそのあとも、漬物のうてかのうまい。味噌漬け大根殿におまかせして、天下口論はこのまま収め、では酒も餅も、丸く一周に付いてまわるではござらぬか。」

「なる程なる程、それも良かろう。静かに治めてくださるか、餅や酒。」

「いやいや大根殿。おさめなくしてあるものか。第一、大根と呼ばれた大きな味噌大根が仲裁で、とまらずにはいられまい。ありがたいありがたい。」

やあやあ、これではそれで治まるぞ、治むる代。年も月もなくして、酒や餅の合戦も、今が今までなくてならない餅合戦、まずこれまで次第なり。

※文中の「……」は聞き取り困難な部分を示す。

【付記】本稿を成すにあたり、兵藤裕巳氏から「餅酒合戦」の録音資料を複数聴かせていただいた。深謝申し上げる。

(いとう・しんご／国際日本文化研究センター・客員准教授)